

シベ族の言語と意識に関する試論

～シベ族老教師への聞き取り調査を中心に～

堤 和 彦

I. はじめに

中国の西北地域、新疆ウイグル自治区のカザフスタン国境の地、チャプチャル・シベ族自治県を中心に、イーニン市、霍城市等には、1764年、満洲（東北）を出発し、翌1765年、チャプチャルに移住したシベ族¹⁾約4,000人の後裔が約33,000人居住し、彼らの母語であるシベ語²⁾を使い、生活している³⁾。筆者は2011年10月12日より同年11月1日まで上記のイーニン市に滞在し、同市在住のシベ族である何文奎氏に従い、主に、シベ語の書記言語（書き言葉）の読み、書きの学習を行った。また、同時に、何氏に3度合計6時間、漢語による聞き取り調査を行った。

何氏は1940年に霍城市で生まれ、“新中国”の成立前後に小学校教育を受け、その後、イーニン市の漢族学校で中等教育、師範専門学校で高等教育を受けた。その後、1962年から1997年まで霍城市の小・中学校に奉職した何氏の人生は、20世紀という激動の現代中国史を生き抜いてきた人々の歴史であるばかりでなく、中国最西北端の地で、シベ族といういわゆる“少数民族”が、この激動の時代をどのように生きてきたかということの一端を窺い知ることができる貴重な記録でもある。以下、何氏の聞き取り調査を中心にその素描を試みたいと思う。

II. 何氏の経歴

1940年： 霍城市にて生まれる。

1947年～1949年：

霍城市の小学校にてシベ語による教育を受ける。

この時期は児童の大多数がシベ族で、その他はウイグル族、カザフ族。

1949年～1954年：

引き続き、霍城市の小学校で教育を受けるが、解放後の中国による教

育を受ける。教育言語はシベ語。このころ少数ながら、漢族児童がいたが、この児童たちも遊びを通して、自然とシベ語を覚えていったという⁴⁾。

1954 年～1958 年：

イーニン市の漢族学校で漢語による中等教育を受ける。

1958 年～1961 年：

イーニン市の師範専門学校（大専）で教員になるための教育を受ける。

1962 年：

故郷、霍城市の小学校、中学校の教師となる。

小学校では全科目を教える。シベ語の授業ではシベ語教科書を使う^①。

中学校ではシベ語、漢語を教える。

小学校のシベ語は、毎日 3 時間ほど。このころはシベ族児童、学生が圧倒的であったため、教科においても、学生指導においてもシベ語、漢語双方が使えるシベ族教師が圧倒的に多かった。

この年、経済的な困窮から、霍城市の約 2/3 のシベ族がソ連領に逃亡。その後の耕作地を耕すために、内地（湖南、河南等）より漢族農民が流入し、漢族学生が増加。この後、逃亡先のソ連領からシベ族は帰ってくるが、漢族の流入も続く。

1966 年～1976 年：

文化大革命時期。学校機能が停止し、出勤するだけだったようである。

1978 年：

学校機能が本格的に回復し、授業再開。シベ族のシベ語能力、特に、読み書きの能力が低下、これに合わせた教材の必要性を感じ、自習教材の作成を開始し、3 年かかり完成。【ガリ版印刷。A4 判 1 冊 120 頁余り、6 分冊】^②

完成後、これを学生に貸与し、シベ語教育を行う。ただし、進学、その先にある就職のためには、漢語能力の向上、漢語による知識の獲得が必須条件になるため、シベ族保護者等の要望もあり、授業数の縮小、或いは、授業自体が行われない年もあった。

1997 年：退職。

Ⅲ. シベ語の未来

社会で生きていくために必要でないものは、なくなっていくことは如何ともし難い。もちろん自分はシベ族であり、自分の母語を使うが、それを下の世代に強要したとしてもしかたがない。これは、筆者が数人の30代のシベ族にシベ語の読み、書きに関して聞き取り調査を行った際に得た回答に関して、何氏に意見を求めた折の回答であった。その一方、自らの母語であるシベ語はもちろん存続してほしいがと付け加えられた。現在の状況から考えて、難しいと思っているところも窺えた。

事実、何氏の子女は、いわゆる漢族学校で漢語教育を受けており、家庭内でのシベ語の会話により、シベ語を聞き、話すことはできるが、シベ文字を読み、書くことはできない。これは、何氏の子女に限ったことではなく、一般的に30代～50代前半までは、聞く、話すことはできるが、読み、書くことはできないそうである⁵⁾。また、更に、その下の世代、特に、10代は聞けるかもしれないが、話せない、或いは、話さない傾向もあるそうである。

これは、かつて、1960年代初頭以前の霍城市で、圧倒的な数のシベ族児童の中にいた漢族児童が、遊びを通して自然に、また、子供の中での人間関係を構築するための必要からシベ語を獲得していったように、現在では、圧倒的な人口を持つ漢族児童・学生の中で、僅かなシベ族児童・学生は、多くの漢族児童・学生の中で遊び、学ぶため、彼らの“共通語”である漢語を使い、敢えてシベ語は使わない、また、シベ族の家族に対してもシベ語を使わず、漢語を使う傾向があるらしい。

また、チャブチャル・シベ族自治州で聞き取り調査を行った際、何氏と同年代の2,3の老人も同じ意見であった。現在、小学校1,2年生だけ、1週間に1時間、シベ語の授業がある。その後はない。これでどうやってシベ語ができるのか。私達老人がいる内は、家でもシベ語で話すが、その後は…。と流暢な漢語で話してくださったのが印象的であった。

Ⅳ. シベ族意識

bi siwe' nane . manju wage. (私はシベ人で、満洲人ではない。)

何氏に限らず、数名のシベ族に同様の問いかけをしたところ、一様に即座に上のような答えが返ってきた。満洲文字を自在に操り、満洲語の一方言と言えるシベ語を話しながらも、やはり、自分たちはシベだという強烈な意識がある。恐らくこれはシベ族全般に見られる意識と考えられる。

また、何氏に、先祖のことについて聞き取り調査を行った時、次のような話をしてくださった。

自分の先祖は、1764年の西遷で、1765年にこの地に来、ソロン營に属し、恵遠の伊犁將軍府に仕える官員を代々勤めていた。祖父も満洲語、漢語で伊犁將軍府へ何度も上奏文を書き、送っていた。清朝末期回族の大反乱が起こった際には、ニルの人々を指導し、男は武器を取り、將軍府に馳せ参じ、女はその留守のガシャン（村）を、犁、鋤で守り、それらが尽きると、石、糞尿にいたるまで投げ戦った。

また、幼少のころは、祖父、父に満文の『三国志演義』、『水滸伝』を読んでもらい、長じては自分で読みふけた⁶⁾。貧しく本を買えない家の子は、本のある近所の家に集まり、字の読めない者は、その家の者に読んでもらい、皆、関羽、宋江になり、血沸き肉踊るようであった。

と身振り手振りを交え、実に生き活きと話してくださった。満洲（東北）、北京では、多くの満洲人が満洲語を失って久しいと言われる清朝末期、それよりも更に4、50年後に当たる“新中国”成立前後においても、なお遙か西北のこの地で満文による教養という名の文化の伝承が脈々と行われていたことを窺い知ることができた。そこに、満洲語の読み、書きができてこそシベであり、八旗に属するシベは文武に亘る教養を持つべきだというシベ族意識と旗人意識との結合を見て取ることができると思う⁷⁾。

V. おわりに

以上、何文奎氏への聞き取り調査から、シベ族の一老教師がたどってきた経験を通して、中国最西北端の地とも言えるチャプチャル・シベ族自治県、イーニン市、霍城市等の地で、シベ族がどのような生き、自ら

の民族と言語をどのように認識してきたのかという点について素描を試みてみた。しかしながら、これが当該地域のシベ族の全てを代表しているかどうかを論じるためには、より広範囲の調査を行う必要がある。しかしながら、今回の調査ではそこまでの時間的余裕がなかった。ただ、従来言われてきた“消滅の危機性がある言語”、“満文の読み、書きとシベ族の旗人意識との関係”について確認できたことは一つの収穫であったと思う。今後は、より広範囲に亘る調査を行い、シベ族における言語と意識に関する問題、特に、世代間での相違点等について述べてみたいと思うが、これらの課題に関しては他日を期したいと思う。

注

1) 及び 2)

従来は満洲語文語文献に現れるシベの文字を、メレンドルフ方式でローマナイズして sibe と読んでおり、(錫伯はその漢語音訳)、そこから、日本ではカタカナでシボと表記していたが、近年、言語調査により、彼ら自身の発音が siwe' であることから、シベと表記されることが多くなっている。本稿はこれにしたがい、シベ族、シベ語と表記することとする。

3) シベが遠く満洲(東北)の地を離れ、チャプチャルの地に遷った原因は、乾隆 20 (1755) 年、大清帝国のジュンガル平定、新疆の成立により、大清帝国内で、この地における西北辺防備の必要性が高まったことがあげられる。その経緯に関しては、加藤直人氏が「アンジュ・呉元豊・趙志强著 シベ族が移動した記録(《錫伯族遷徙考記》)」(『東洋学報』第 67 巻第 1・2 号、1985 年 12 月)において紹介されたように、シベ族の高い騎射能力及び狩猟生活からくる環境適応能力に期待するところが大きであったからである。ただ、これも同氏の指摘のように、このころシベ族は既に農耕生活を営んでおり、当初の目的と違い、農地の必要性からイリ河の南岸、現在のチャプチャルに定住するようになった。

4) シベ族の中にはシベ語の他に漢語のみならずウイグル語等も聞き、話すことができる者が珍しくないそうである。何氏もそうであったし、聞き取り調査を行った 30 代のシベ族の中の何人かも聞け、話せるそうである。理由は、や

はり幼少のころより一緒に遊ぶことを通して自然に覚えたという答えであった。

- 5) 1960年代以降のシベ族は、社会から、シベ語の読み、書きの能力形成を要求されてこなかった。それは、中国社会の中でより良い進学先、就職先を獲得するためには漢語能力の向上が重要視されたからだと考えられる。また、もう一つの理由として、口語言語（話し言葉）と書記言語（書き言葉）の乖離があげられるだろう。例えば、“人”は、口語言語（話し言葉）では nane〈nan〉であるが、書記言語（書き言葉）では nyalma である。
- 6) 満文による中国古典文学の翻訳は広く行われており、近年出版された賀靈編『錫伯族民間伝録清代満文古典訳著輯存』上、下（2010年、新疆人民出版社）2,500ページを超える巨冊の中にも、『三国演义』、『楊家将』等の手写本が写真影印版として収録されている。
- 7) 九州大学久保智之教授のご教示によれば、1970年代に作られ、現在でもシベ族の間で広く歌われている「ye#li bira イリ河」という歌の最後の歌詞に、下記のような文言があるそうである。

「万年伝え来た祖国の辺境、父祖は守って来た、勇敢な民、恩愛ある君主」
これも現代に残る旗人意識の表れと見ることができるかもしれない。

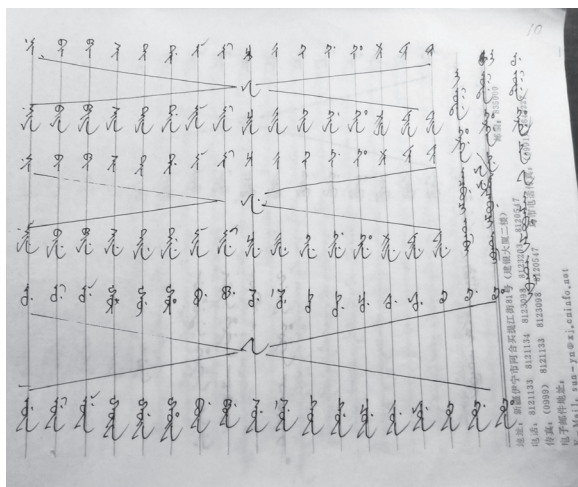
付記：

本稿は、麗澤大学経済社会総合センター共同研究プロジェクト「中国山海関地域をめぐる歴史社会研究」研究会（2011年12月9日）での発表を基に、改訂増補したものである。発表当日、貴重なご意見をいただいた本学外国語学部櫻井良樹教授、松田徹教授、汪義翔非常勤講師に感謝申し上げます。

また、聞き取り調査に快く応じていただいたのみならず、聞き取り調査の内容、所蔵のシベ語教科書、新たに書き下ろして下さったシベ語教科書の本稿への掲載を快く許していただいた何文奎先生には心より感謝申し上げます。



① 何文奎氏所蔵シベ語教科書



② 何文奎氏書き下ろしシベ語教科書
(自主教材内にも同様の表が収録)